

令和2年度 甲府市立上条中学校 校内研究

1. 研究主題

“学びに向かう力”の育成

～ 達成感のある授業を目指した、指導と評価を通して ～

2. 研究主題について

(1) “学びに向かう力”とは

文部科学省の「新学習指導要領の全面実施と学習評価の改善について」（令和元年6月）の小学校及び中学校各教科等担当指導主事連絡協議会資料では、学習指導要領に示す目標や内容である「学びに向かう力、人間性等」は観点別学習状況評価の観点としては「主体的に学習に取り組む態度」としている。「学びに向かう力、人間性等」には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取る部分と「感性、思いやりなど」といった観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれない個人内評価を通じて見取る部分がある。

また2020年4月現在、臨時休校により授業を通した学習を行うことができていない。その中で生徒は教師による家庭での時間割提示をはじめとした学習計画や課題に家庭学習、本校では「上条ホームスタディ」として行っている取組を通して新学年の内容を学習している。この学習により、新学年の内容について主体性をもって取り組むこととなる。しかし、授業を行っていないことを考えると、学習の進捗や理解については学校での学習に比べて、個人による差は大きなものとなっているであろう。

そこで本研究では生徒が課題や目標に向かって、「自ら学びたい」という欲求をもち、自らの意志で学び続ける力を育むことを目指す。それは知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら主体的に学ぼうとすることを通して養われていくものといえる。そこで培われた力は、多様に変化する予測困難なこれからの社会の中で、生涯にわたって主体的に学び続けることができる力であるともいえる。よって本校では、“学びに向かう力”を「生徒自ら主体的に学びに向き合うための力」ととらえる。

(2) 目指す生徒の姿

本研究では、以下の生徒の姿の実現を目指し、教育課程全体で取り組んでいく。

【 具体的な姿 】

- ・ 学ぶことに関心や意欲をもつ生徒
 - 高い志や意欲をもち、課題を発見・解決するため積極性をもって学びに向かうことができる
- ・ 様々な状況下における社会や他者との関わり合いの中で考えを広げたり、深めたりする生徒
 - 自他の考えを認め合いながら、個人・集団の考えを深めたり発展させたりすることができる
- ・ 生徒自ら工夫し、見通しをもって粘り強く取り組む生徒
 - 教科等の知識及び技能を活用して、課題を解決する等のために思考、判断、表現等ができる
- ・ 自らの学習課題を振り返って次につなげる生徒
 - 授業を通しこれまでの自分の認識を更新したり、新たな価値を創造したりすることができる

3. 研究の視点

視点1 見通しを持つための発問・問題提示や導入の工夫

- ・ 学びの意義が見えるような実生活に関する問題提示の工夫
- ・ 解決方法の見通しを持てるような教具の工夫
- ・ プリント学習等の内容吟味による家庭学習の充実 など

視点1は、見通しをもてるようにするための問題提示や教具の工夫を通して、生徒一人一人が主体的に問題に取り組み、達成感を得られるようにすることを目指す。実生活に関連する問題を具体物や絵、図などを使って提示したり、教師が問題場面を演示したりするなど、問題提示や教具の工夫が大切である。また、生徒が与えられた課題に対して、その解決のために必要となる知識・技能、またそれらを活用できる思考力、判断力、表現力等を獲得していくことができるような家庭学習の在り方についても考えていく必要がある。

視点2 考えを広げ深めるための対話の場の工夫

- ・ 必要に応じて、考えを表現する活動に必要性を感じさせる工夫
- ・ 生徒の考えを広げたり深めたりするための対話が生まれる工夫
- ・ 対話の場面や方法、学習形態（ペアやグループの編成）の工夫 など

視点2は、考えを広げ深めるための対話の場の工夫を通して、生徒が達成感を得られるようにすることを目指す。学校での授業による学習は、対話を通して生徒が考えを深められるようにするためにも、まずは、生徒一人一人が自分の考えを持ち、他者のわかりやすく伝えるために表現活動を工夫するように指導していくことが大切である。また、相手の話を聞き、自分の考えを付け足して話したり、わからないことを質問したりするように指導することも大切である。生徒が学習を進める中で他者との対話が必要な場面を見極め、自ら関わり合いを求めていく姿がみられることが望ましい。家庭学習で培った知識・技能を、授業においては協働的な学習を取り入れることで生徒の“学びに向かう力”を高めていきたい。

視点3 学びを生かす振り返りの場の工夫

- ・ 自らの力で学びの過程を振り返るようにする工夫
- ・ 学んだことを生かす活用問題の工夫 など

視点3は、学びを生かす振り返りの場の工夫を通して、生徒がより難しい問題を解いて達成感を得られ、自分の成長を実感できるようにすることを目指すものである。振り返りで大切なことは、学習のめあてに対する振り返りが的確にできること。情意面での「楽しかった」「大変だった」という振り返りだけではなく、「何が大切だったのか」「どこでつまずき、次はどうしたらよいのか」といった、学びの過程について振り返り、生徒自身が学習のまとめができるようにしたい。的確な振り返りからは、「次はもっとこうしたい」「～ができるようになりたい」などの意欲が生まれ、“学びに向かう力”が高まると考えられる。

4. 研究の方法

(1) 研究の全体構造

現代社会の要請

- ・ 社会を生き抜く力
- ・ 知識・技能の習得
- ・ 思考力・判断力・表現力の育成
- ・ 学びに向かう力、人間性等の育成
- ・ 新たな生活様式の模索

生徒の実態

- ・ 明るい生徒が多い
- ・ 学力、体力、意欲の二極化
- ・ 自分の考えを表現できるから、他者から学び、考えを再構築することが苦手

“学びに向かう力”の育成

～達成感のある授業を目指した、指導と評価を通して～



- | | |
|-----|------------------------|
| 視点1 | 見通しを持つための発問・問題提示や導入の工夫 |
| 視点2 | 考えを広げ深めるための対話の場の工夫 |
| 視点3 | 学びを生かす振り返りの場の工夫 |

(2) 研究方法

授業研究を通して、“学びに向かう力”を育む指導方法・評価の在り方を明確にするとともに、県、市や本校の教育目標に照らし合わせて課題を解明する。そのため、研究主題の視点に沿った検証授業を行い、成果と課題をまとめて日々の授業に生かす。また、各自の日々の授業でも視点に沿った授業を展開する。

5. 学習ガイダンスについて

以下のねらいを持つもので、新たな学習に入る前につくり、生徒に配布をするものを作成する。

- 学習全体の見通し
 - ・ その期間（時数）の中で、何を学習するのかの見通しを持つ。
- 評価と関連して
 - ・ 評価方法を明記することで、「何を求められているのか」「何をしなければならないのか」が明確になり、学習に対して具体的な取り組みの見通しを持つ。
- 学びの振り返り
 - ・ ガイダンスの自己評価欄を設けたり、単元ごとの振り返りシート用いたりすることで学習の振り返りができる。